

福祉のひろは

特集

いま、求められる“アウトリーチ”とは

——地域に潜在し、声をあげられない人の問題への接近方法——

精神障害・高齢分野・社会福祉協議会等の実践事例を
通して（和歌山・東京・新潟・京都・滋賀）

出かける、支える、ともに育つ——大阪の保健師活動から

7

2013



ひろはトーク

岩手県野田村村長

おだ

ゆうじ

小田 祐士さん

生きる力・暮らす力を伝えることが大切

編集 総合社会福祉研究所

住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町10
代表取締役社長 川下 晃正
TEL (075) 211-7277
FAX (075) 211-7270
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

〒601-8382
京都市南区吉祥院石原上川原町21
<http://www.creates-k.co.jp>

クリエイツかもがわ

TEL 075 (661) 5741
FAX 075 (693) 6605
価格税込・送料何冊でも240円

発症・診断、症状とその対応、リハビリテーションをわかりやすく解説した入門書。当事者・支援者の声と、回復後の生活環境・就労支援情報を豊富に盛り込みました。
定価 1260円

橋本圭司 ◆ 監修 朝日新聞厚生文化事業団 ◆ 編

高次脳機能障害



なるほど 誰にもおきる
見えない障害

●高次脳機能障害を正しく理解しよう！

万歳登茂子・脳性マヒの二次障害実態調査実行委員会 ◆ 編著



脳性マヒの二次障害実態調査報告

成人脳性マヒ ライフ・ノート

CD-ROM

本文を
PDFにして
収録

予防が大切
「二次障害自己
チェック表」
掲載

男女問わず誰もが介護を担う時代。家族と自分の老後を安心して託せる、新しい介護のスタイルとシステムの創造を提唱。

津止正敏 ◆ 著

ケアメンを 生きたる

100万人へのエール
男性介護者

定価 1680円



地域福祉の「対象の対象化」

——子ども・若もの支援ネットワークおおさか——

二〇一〇年、総務省はひきこもっている人が約七〇万人（予備軍一五五万人）という調査結果を明らかにしました。しかし、当事者や家族への国による支援の具体化は進んでいません。自治体職員の多くは、課題意識を持ちながらも、人員と予算が削られ身動きがでない現状です。ネットおおさかは活動して八年、支援対象者は一〇〇名を超えます。今、気になっているのは、ひきこもり状態が長期化している人、四〇歳を超える当事者、親も七〇歳を超えるというケースが増えていることです。ひきこもり状態にある人へのアウトリーチを含んだ支援をはじめ当事者の実態、その変容、さらには年齢進行に応じた総合的で連続的な支援体制の構築が切実に求められています。

（右は相談員の高塚由美子さん、左は青木道忠さん。文も青木さん）



30年以上も自宅でひきこもっていた人（手前）が、保健所の紹介からネットにつながりました。5年ほど耕作されていなかった農地をネットが借り、ひきこもりから動き出した人たちや支援者の輪で整備し、作付けを開始。毎日通って農作業をしています。写真は、カボチャやスイカの苗に水をかけているところです。「こちらからいろいろと聞かない。話せるような関係ができると、徐々に口を開くようになります。今では、次に何をしたらよいかまで考えて、朝早くから来られています。仕事も非常に丁寧だし、こちらが学ばされることも多い」とネットスタッフの^{ぶちまる}駁丸さん（奥）。





ひきこもることになった若者支援の基本は、相談にこられたご家族や当事者の苦しみやつらさを共感的に受け止め、その悩みやねがいを一緒に整理していくところにあります。大切なのは、支援者がその問題を抱え込まないようにすることです。当事者や家族の了解も得ながら、問題の内容に即して福祉や医療、労働など各分野の公的機関や支援機関・団体に連携・協力を求め、支援を進めていきます。その要になるのがケース会議です。そしてその蓄積が地域における支援のためのネットワーク構築の土台となっていきます。（このページの写真・文は青木道忠さん）



さなだなおし

昨年発刊された『真田是著作集』の中で、真田是さんは“対象の対象化”を問いかけています。金子みすゞは「星とたんぼぼ」の後半、「ちつてすがれたたんぼぼの、かわらのすきにだァまって、春のくるまでかくれてる、つよいその根はめにみえぬ。見えぬけれどもあるんだよ、見えぬものでもあるんだよ。」と、詩の前半で昼の星は見えないけれどもあることを示し、後半ではその可能性を見ていたのでしょうか。森井昌仔昌さよさん（南河内地域若者サポートステーションの学校連携推進リーダー）は「自立は、人と人の輪があって、その中での自立。孤立とは違う。そして専門家は、その中で本人が選択できる方向を示して寄り添うことが大事」と言われていました。来年2月に「社会的ひきこもり支援者全国実践交流会」が大阪で開催されます。ネットの人たちも軸の一員になって迎えます。

(写真・文：下野祇園)

【ひろばトーク】

生きる力・暮らす力を伝えることが大切 小田 祐士 6

福祉のひろば

2013年7月号

●特集● いま、求められる“アウトリーチ”とは ——地域に潜し、声をあげられない人の問題への接近方法——

【精神分野での実践】 10

“アウトリーチ”の積み重ねが、安心・安全に生活できる地域をつくる
山本 耕平

和歌山でのアウトリーチとネットワークづくり

和歌山市保健所・宮本病院・社会福祉法人一麦会麦の郷

【高齢分野での実践】

〈東京都港区〉ふれあい相談員のひとり暮らし高齢者等訪問 真継 直 22

〈新潟〉地域包括支援センター坂井輪の取り組み 26

〈京都〉住民の意識を変えるのも広義のアウトリーチ 堀田 晃平 30

【社協】相談活動を要とする大津市社協の地域福祉活動 山口 浩次 34

【保健所】出かける、支える、ともに育つ

——大阪府保健所保健師の現状と保健師活動のあり方 40

●トピックス●

全国で急増する宿泊付きデイサービス 44

第19回社会福祉研究交流集会 in 東海（8月31日～9月1日） 46

若者がつくる「福祉のひろば」Part2 大学で講義をしました！ 48

●連載●

フォーラム 日本の学童保育の新たな一ページに 植田 章 52

連載 小川政亮 第二部 自伝（16） 小川 政亮 54

反動の嵐の中で、そして外国人の人権保障を問う塩見訴訟

相談室の窓から T君と「わくわくクラブ」（2） 青木 道忠 58

わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」 早川 一光 60

総合人間学のすすめ（1）

育つ風景 辛抱強く 清水 玲子 62

いっぽいっぽの挑戦（4） ある日のスタッフの活動 繁澤 多美 64

映画案内 『レ・ミゼラブル』 吉村 英夫 66

現代の貧困を訪ねて 生田 武志 68

橋下市長に「子どもの家事業」廃止撤回を訴える

なにわ銭湯見聞録（参） ラッキー植松 70

いただきます！ 野菜たっぷり 特製ビビンバ 南海香里のさと 72

私の研究ノート 大澤 亜里 74

コルチャック研究を通して日本の子どもの現状をみる

ホームレスから日本を見れば ありむら潜 76

花咲け！男やもめ 川口モトコ 77

●表紙の絵●
神門やす子



●カット●
川本 浩

みんなのポスト 50／今月の本棚 49／福祉の動き 78

●グラビア● 地域福祉の“対象の対象化”

生きる力・暮らす力を 伝えることが大切

岩手県野田村村長 小田 祐士ゆうじさんに聞く

岩手県野田村は岩手県北東部、北上山地の沿岸部にあります。NHK朝ドラ「あまちゃん」の舞台、久慈市くじの南隣です。野田村には、東日本大震災の地震後わずか四五分で津波が押し寄せました。高さ一二メートルの防潮堤を乗り越えた津波は、海岸から一キロ先まで上ってきました。

野田村保育所は海から五〇〇メートル。当時、八〇人の子どもたちが園内にいました。地震から五分後に子どもたちと保育士は全員、高台に向けて避難を開始しました。日頃から、地震発生後一五分で津波が来るという想定で避難訓練をしていました。津波が来た時にどう子どもたちを守るのか、普段の散歩でも実践的な訓練を行っていたのです。避難を始めて四〇分後に津波が来ました。園舎は流されてしまいましたが、子どもたちは第一次避難所（保育所から五〇〇メートル）、そして二キロ先の中学校まで、誰一人欠けることなく避難することができました。現在、保育所は高台に新築移転されています。

また、今年三月、大阪大学の野田村サテライトがオープンしました。学生たちが滞在し、毎月一日にセミナーを開催したり、遠隔教育システムで各地のサテライトでの研究・教育に参加できるシステムの構築も進められています。こうした活動について小田村村長は次のように話してくださいました。

「この方々は、非常に自然な感じで村民とかかわっているという印象を持っています。応急仮設住宅を巡るときも、押しつけない・寄り添うという感じで感心しています。私自





おだ ゆうじ

1955年生まれ。今年2月の村長選で3選を果たす。「住民が主役の村づくり」を掲げ、高齢者福祉、子育て支援の充実、第1次産業の振興を訴える。野田村では東日本大震災の津波で38人が亡くなり、住宅約480棟が倒壊。高台移住事業、村役場周辺の区画整備、保育料の一部無料化やヘルパー資格取得補助などを進める。

身はこれからの課題として、この「寄り添い」ということが大切だと感じています。」「多くの住民が高齢化し、何かを与えたいということではなく、それぞれの居場所と言いますが、場を創ることが大切です。しかし、行政で責任を持って見守るには限界があります。支える側よりも支えられる側のほうが多くなっていく。だからこそ、お互いに助け合ったり、できることを出し合う。そこには、コーディネートする力や機能が非常に重要になってきます。」「さまざまなことがマニュアル化されていますが、震災ではいろいろなことを身にしみて体験しました。想定を超えた災害ではマニュアルは役に立たない。通信手段を失い、情報伝達ができないでどれほど困ったか。その中で感じたことは、いかに生きる力や暮らす力が大切か、ということ。日頃からどのようにして身につけ、伝えていくか。それが問われているのです。」「村でも、生きる知恵がある人たちがいる一方で、情報化社会の中で情報手段を持ち合わせていないと困る人たちがいます。自然体験も含め、教育の必要を感じました。キャンプで、親が一生懸命に食事を用意し、子どもはテントの中でテレビゲームをして待っている。それでは生活や生きる力は伝わりません。」

「私は、住民が本来持っている力に大いに依拠して、本来の意味での住民主体のまちづくりを掲げていきたい。そのために行政がしっかりと受け止めていきたい。『福祉のひろば』読者の方々には、今回の震災のことを忘れないでほしいと願っています。我々は必ず復興し、以前よりすばらしい村を創ります。そうでないと、亡くなった人たちに申し訳ない。野田村に限らず、人口が少なくても頑張っている村や町が存在していることを忘れないでほしいのです。」

（「内は小田村長のお話。その他は聞き手〈黒田編集主幹〉が補足しました。」）

特集

いま、求められる “アウトリーチ”とは

——地域に潜在し、声をあげられない
人の問題への接近方法——

生活保護利用のハードルを高くする動きの中、大阪市で母子餓死事件が報道されました。しかし、従軍慰安婦を容認する首長の下、次に続く事態を心配する声が多くあります。地域に潜在し、声をあげられない人々の問題への接近方法としての「アウトリーチ」は、専門職が住民のところまで出向いて行う支援です。社会的孤立問題が浮上している中、この接近方法はますます重要だと思われれます。

特集では、①厚生労働省が二〇一二年度から実施している精神障害者アウトリーチ推進事業、②二〇一二年版の高齢社会白書でのアウトリーチの言及、③二〇一二年の「社協・生活支援活動強化方針」の中で示された提起等について、実際の現場で培われている実践や提起の受け止めを取材し、考察します。

◆
本誌編集委員の河合克義さん（明治学院大学）は、「社会福祉の対象について、社会福祉が制度・政策として、また理論